

聖書：創世記 31：17～32：2

説教題：この二十年間

日時：2024年3月3日（朝拝）

ヤコブはついに自分の生まれた国、父たちの国カナンに向けて出発します。この地に逃亡して来てから 20 年が経過していました。まさかこんなに長くなるとは彼も考えてもみなかったでしょう。彼はラバンの娘の内、妹のラケルが欲しくて 7 年間ラバンの下で働きました。ところが彼にだまされて、もう 7 年間働きました。さらに故郷に帰るにあたって報酬を得るため、6 年間働きました。そんな彼に主から、先週見た 13 節で「さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい」という言葉がありました。この実行に当たってヤコブはラバンに告げませんでした。これまでも色々な策を講じてなかなか行かせてくれなかったラバン。話したところでスンナリ送り出してくれるとは到底考えられません。むしろ娘たち、孫たちを押さえて行かせないようにあの手この手と策を巡らして来るでしょう。そこでラバンが羊の毛を刈りに出ている時に決行します。この際、ラケルは父が所有していたテラフィムを盗み出しました。これは一体何でしょうか。後に 30 節でラバンはこれを「私の神々」と言っています。おそらくこの家で代々受け継がれて来た家の守り神のようなものだったのでしょう。なぜラケルがこれを盗み出したのかについては 3 つの捉え方があるようです。一つはこれは貴重な品であり、金目の物としてラケルは盗み出した、つまり経済的な価値の観点からです。二つ目はヤコブに従う時の保険として、もしうまく行かない場合はこの神に頼れるように、つまり宗教的な観点からです（この場合、ラケルは信仰的に大いに問題があることとなります）。そして三つ目はラバンは占いをしていたことが 30 章 27 節に記されていましたが、ラバンがこの神々を用いた占いによってヤコブの逃亡や逃亡先を知ることがないようにするためということです。おそらくこの一つ目と二つ目のどちらかであったのでしょうか。このことが後で問題となります。

さてラバンは三日目にこのことを知ります。このニュースを耳にした彼は身内の者たちを率いて、すぐさま追跡します。相手は女、子ども、家畜、財産を連れた者たちです。それに比べて追いかける方は精鋭部隊です。7 日の道のりを追って追いつきます。しかしそこで神の介入があったことが 24 節に記されています。神は夜、夢でアラム人ラバンに現れて仰せられました。「あなたは気をつけて、ヤコブと事の善悪を論じないようにしなさい。」 この「善悪を論じない」とはどういうことでしょうか。実

はこれと同じ言葉をラバンは創世記 24 章 50 節で語っていました。アブラハムのしもべがラバンの妹のリベカこそ主が備えてくださったイサクのお嫁さんですと話した時、ラバンはこう言いました。「主からこのことが出たのですから、私たちはあなたに良し悪しを言うことはできません。」これはあなたに対して私たちは何も言えません、言いませんという意味です。つまり神はラバンにここで「何も言うな！」と言っているわけです。引き止めてはならない、彼に手を出すな、と。このように言われなければヤコブに手を出し、彼を引き戻そうとするラバンだったのでしょう。この神の介入によってヤコブは守られることになります。

さてラバンがヤコブに追いついた後のやり取りが 25 節以降にあります。大きくこの部分を三つに分けることができると思います。一つ目は 25～35 節です。ラバンは 26 節で「何ということをしたのか。私を欺いて、娘たちを、剣で捕らえられた者のように引いて行くとは」と言います。続いて「なぜ、あなたは逃げ隠れて私を欺き、私に知らせなかったのか。タンバリンや豎琴で喜び歌って、あなたを送り出しただろうに」と言います。ここまで創世記を読んで来た人なら、果たしてラバンはそうしただろうかとクエスチョンマークがつくような言葉です。彼は「しかもあなたは、私の孫や娘たちに口づけもさせなかった。あなたは全く愚かなことをしたものだ」と続けます。しかしラバンは前の日の夜に主に引き止められたこともあって、このことについてはそれ以上は責めません。ただ一つのことだけを問いました。それは「なぜ私の神々を盗んだのか」ということです。ヤコブは、もし「あなたのご自分の神々をだれかのところで見つけたら、私はその者を生かしておきません」と言います。私たちはこれを聞いて、そこまで言ってしまうて大丈夫か？と心配します。もちろんヤコブには身に覚えのないことでしたが、ラケルが盗んだことをヤコブは知らなかったのです。読む私たちはハラハラします。

調べはヤコブの天幕から始まって、次にはレアの天幕、二人の女奴隷の天幕、そしてラケルの天幕へと進みました。ラケルは一番最後に時間があつたからでしょうか、彼女はテラフィムをらくだの鞍の中に入れ、その上に座りました。そしてラバンが来た時に、こう言いました。「父上、どうか怒らないでください。私はあなたの前で立ち上がることはできません。女の常のことがあるからです。」彼女は生理的な問題のため、ここから立ち上がれないと言います。旧約では月経の期間は汚れているとされ、後のレビ記ではその間に彼女に触れる人も汚れると規定されます。ですからまさか大

切な神々が、そんなラケルの下にあるとはさすがにラバンも考えなかったようです。こうして彼はだまされました。人をだますのに巧みなラバンが自分の娘にだまされました。ここに大なる皮肉があります。また宗教的に汚れた状態にあるラケルの下に隠されていた神々とは一体どんな神なのか！という風刺もあります。冒瀆的な状態に置かれて何もできない神とは果たして神なのか。

さてすべての天幕を探してもラバンはテラフィムを見つけることができませんでした。これを受けて 36 節からヤコブが一気に反撃に出ます。ここが二つ目の部分で 42 節まで続きます。ヤコブは 36～37 節にかけて「私にどんな背きがあり、どんな罪があるというのですか。私をここまで追いつめるとは。あなたは私の物を一つ残らず調べて、何か一つでも、あなたの家の物を見つけましたか」と迫ります。そしてこれまで 20 年間に亘って、どんなにラバンの下で忍耐し、苦勞して仕えて来たか、これまでため込んだフラストレーションを一気にここで爆発させます。ヤコブは確かにラバンの下で誠実に、また忠実に仕えて来ました。その間、ラバンの雌羊も雌やぎも流産しませんでした。またヤコブはラバンの群れの雄羊も食べませんでしたし、野獣にかみ裂かれたものはヤコブが負担しました。なのにラバンは盗まれたものについてもヤコブに責任を負わせました。ヤコブは奴隷のように扱われて、昼は暑さに、夜は寒さに悩まされ、眠ることもできませんでした。彼はラバンの二人の娘のために 14 年間、またラバンの群れのために 6 年間、合計 20 年間仕えました。しかしラバンは何度もヤコブの報酬を変えました。「もし、私の父祖の神、アブラハムの神、イサクの恐れる方が私についておられなかったなら、あなたはきっと何も持たせずに私を去らせたことでしょう」とヤコブは言います。ラバンは相当にひどい扱いをヤコブに対してして来ました。そんな彼とラバンを主が見ておられて、昨夜のこと、すなわちヤコブと事の善悪を論じるな！と介入する主の言葉があったのだとヤコブは言います。

ラバンはさすがにこのように語るヤコブに押されて、これ以上責めることができなくなったのでしょう。そこで契約を結ぼうという話になります。これが第三の部分で 43～55 節までです。二人は石を立てて柱とし、これを境に互いに互いを侵さないといういわば不可侵条約を結びます。47 節にラバンはそれをエガル・サハドタと名づけ、ヤコブはそれをガルエデと名づけたとありますが、欄外に注がある通り、これらはそれぞれアラム語とヘブル語で「証しの塚」を意味します。またここはミツパとも呼ばれたと 49 節にあります。欄外にあるように、これは「見張りをする」という意味で

す。主がお互いを見張っていることを覚える場所であるということです。この契約を結ぶにあたって 53 節でラバンは「アブラハムの神、ナホルの神、彼らの父祖の神」にかけて誓ったとあります。ここにラバンの信仰はいくつかの神が混ざったものになっている様子が伺われます。一方ヤコブは「父イサクの恐れる方にかけて」誓いました。

「イサクの恐れる方」という表現はここと少し前の 42 節にしか出て来ません。これは父イサクが主への恐れをもって、畏敬をその大きな特徴として歩んだことを示しているのでしょう。ヤコブはそのことを見て来た者として、そのように主を表現したと考えられます。これは主に対する正しい態度について私たちに大切なことを教えてくれるものとなっています。こうして二人がともに食事をし、一夜を明かした後、ラバンは自分の所へ帰って行きました。こうしてヤコブはついにラバンから解き放たれることとなったのです。

ヤコブは旅を続け、いよいよ約束の地が近いところまで来た時の話です。32 章で神の使いたちがヤコブに現れました。2 節に「ヤコブは彼らを見たとき、『ここは神の陣営だ』と言って、その場所の名をマハナイムと呼んだ」とあります。前にこのように御使いたちがヤコブに現れた時がありましたが、それはいつだったのでしょうか。それは創世記 28 章、ヤコブがカナンの地を出てラバンのもとへ行こうとした時です。約束の地を出て行こうとするあの時に御使いたちの幻があり、また今、約束の地に戻ろうとする時に御使いたちの幻がありました。つまりこれはパダン・アラムで生活したこの 20 年間、目にはっきりは見えなくても、ずっとこのような御使いたちの守りが彼の上にあったことを示すものでした。この 20 年間は、先ほどヤコブがラバンに語ったように、彼にとってとても苦しい 20 年間でした。筆舌に尽くしがたい 20 年間でした。ラバンにだまされ、奴隷のように働かされた 20 年間でした。それは自分の罪がもたらした罪の刈り取りの期間でもありました。この苦しみを通して人をだますことがどれほど他者を苦しめ、また人間関係を破壊するものであるかを彼は身にしみて思い知らされました。そんな彼自身もまだまだ未熟で不甲斐ない姿を多くさらけ出しました。いつその地で自分の人生が終わりとなってもおかしくありませんでした。しかしそんな生活の中で主がともにいてくださり、どこにあっても守ってくださるというかつての約束が真実なものであることをヤコブはだんだんと知るように導かれました。ですから今日見た 42 節でも「もし、私の父祖の神、アブラハムの神、イサクの恐れる方が私についておられなかったなら、云々」と、神が自分とともにいて守ってくださったことを感謝する言葉を彼は口にしていました。また 52 節でラバンは他の

神の名も用いて誓いましたが、ヤコブは父イサクの恐れる方、主の名前のみをお呼びして誓いました。そうして今、この約束の地の手前まで来た時、ヤコブは 20 年前にこの地を出て行った時と同じように、自分とともにいる多くの天使たちの姿を見させられたのです。これはこの間もずっとこのような御使いたちを遣わす主の守りが彼の上にあったことを意味したでしょう。主が約束に真実でいてくださり、今日ここまで、この場所に戻って来るまでの歩みを導いてくださった。ヤコブはどんなに深く感動し、また主に感謝したことでしょうか。そしてこれはなお先にある新しいチャレンジに備えるための励ましでもあったでしょう。彼はこれからエサウに会います。これまでの 20 年間は相当に苦しいものでしたが、なぜ逃れて行ったのかと言えば、それはエサウから逃れるためです。そのエサウにいよいよ会わなければなりません。それを前にしての主からの励ましでもあったのだと思います。これまでの苦しい苦しい 20 年間を守ってくださった主はこれからも私を守ってくださる、と。

ヤコブとともにいると言われた神は同じく神の民である私たちとともにいてくださると言っておられます。神はそのことを御子イエス様を送ることによって決定的に示してくださいました。イエス様において「神は私たちとともにおられる」というインマヌエルの祝福はより具体的に明らかにされました。そのイエス様は私たちの罪のために身代わりに十字架にかかってくださり、代価を払って復活した後に、「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」と約束されました。そして天に昇って聖霊を遣わし、今日も私たちとともにいてくださいます。そして新約聖書にも御使いが出て来ますように、神は今日も目には見えない御使いたちを通して私たちを守り支えていてくださいます。ヘブル人への手紙 1 章 14 節:「御使いはみな、奉仕する霊であって、救いを受け継ぐことになる人々に仕えるために遣わされているではありませんか。」

ヤコブは神の使いたちを見て驚き、「ここは神の陣営だ」と言って神に感謝しました。私たちもこの神の守りによって今日の自分があることを覚えて感謝したいと思います。私たちもこれまでの歩みを振り返るなら、ヤコブと同じく決して立派ではない自分であったことを思わざるを得ません。数多くの罪と失敗を神の前にさらし、恥ずべき多くの行いをして来た者たちでした。しかし神が恵みをもって今日のここまで導いてくださいました。私たちも御使いたちによる神の陣営に囲まれ、支えられて、今日このように立たせていただいている者たちです。この神の真実と恵みを覚えて心か

ら感謝し、神に栄光を帰して神を礼拝したいと思います。そして、この信仰にしっかり立たせられて新しい課題に取り組む者とされたいと思います。ヤコブがここで御使いたちの陣営を見せられたのは、これまでの神の守りと真実を感謝すると同時に、これからエサウに会うという新しい課題に立ち向かうためです。私たちも主がここまでの自分の歩みを守ってくださったことを感謝し、その主がこれからも導いてくださることを仰いで主に信頼し従う歩みを献げ、ともにいてくださる主の力と守りによって新たな課題に立ち向かい、主が備えたもうさらなる祝福へと導かれて行く者たちでありたいと願います。